

# 「荒れる」とはどういうことか？ 人心が荒廃するとき何が起きているか？

## 「武士道」とは責任を自覚する者の生き方

Greatchain

2020/08/28

いまアメリカで、そしてロシアを除くヨーロッパで起きていることを、一言でいうとすれば、「荒れる」という言い方がふさわしいだろう。これは、極左とか無神論とか無政府主義とか言われるものの、特有の現象である。警察を廃止せよ、刑務所をなくせ、裁判所をなくせ、と言って火をつけ破壊する。そして人民が人民に敵対する。あるいは悪辣な策士どもに、敵対させられる。いま、米2大政党の全国大会が行われているが、そこでは理性が通じないのだから、ほとんど無意味だとも言える。しかし逆に、これほど重大な意味のある選挙は、歴史上これが初めてだとも言える。

この混乱は、「けじめ」の全廃であるかのようだ。動物でもある程度は理解する、この「けじめ」を破壊し、勝ち誇り、それですべて解決するような気分になる。これは人間の墮落の最後の形である。その特徴は、教会が焼き討ちされ、トランプがこれに断固として対処すると言えば、これを「生殺与奪の権をもつ帝王のようだ」と、ヘイト批評をするメディアに、よく現れている。

これは、男女の「けじめ」をなくそうとする、一見穏やかなLGBT運動にも現れているもので、この創造された自然界の秩序を、破壊しようとする運動は、基本的に人間の無能を示すものである。「警察を廃止してあとどうするの？」という質問は、「男女を廃止してあとどうするの？」という質問と本質的に同じである。無責任な破壊衝動が、改善につながるように勘違いする馬鹿がいるということだ。もし、この「廃止」を肯定するならば、「京アニメ」の犯人の行動も、親による育児放棄のような行動も、肯定しなければならなくなる。これは考え方の違いなどというものでなく、「けじめ」がつかなくなった、我々の文化から生ずる病気である。この言葉は、生物種のあり方を説明するものでもある。地上のあらゆる生物種は「けじめ」をつけて生きている。ただらと変化して、弁別できない種というものは存在しない。

自分が、自分を越えた創造者の一部（分け御霊＝みたま、という）として生きていることを、自覚することは、知的・美的・道徳的に敏感な感性を持つ者の特性である。これを故意に「荒れ」させ、鈍感にさせようとする計略があることを、我々は見破らなければなら

ない。この者たちは歴然と、犯罪に加担する犯罪者たちである。「思想」の違いなどではない。これらメディアや学界の半知性人たちは、**創造者以外のどこから、科学や芸術や道徳が生まれると考えているのか？**

ここから、いつか触れた、新渡戸稲造の『武士道』について述べてみたい。新渡戸は、日本では宗教教育はどうなっているのかと、外国人に訊ねられ、キリスト教のようなものがない代わりに、「武士道」というものがあると説明した。武士道を持ち出すことによって、彼は彼の意図した以上の貢献をしたのではないだろうか？ なぜなら、**武士道とは、責任をもってこの世を生きる者の生き方のことだからである。**それは、ほとんどの宗教のもつ、疑似唯物論的な、暗黙の取引のようなものではない。生き方を教えられて、それに従って生きる受動的なものではない。**それは、能動的な責任感のことで、我々の日本人が本能的に持っているものである。**それは君主や藩主に対する忠義のようなものではない。忠誠という徳目は、「公」の立場として、形式的に含まれているかもしれないが、武士道の本質はそこにはないと思う。

我々は、「生かされている」という言い方を昔からしている。これは「私の命は私のものであって私のものではない」と言い換えることもできる。これも、武士道という宗教の持つ一面ではないだろうか？ 生かしている者が何者であり、何であるかを明確にすることなく、「生かされている」という現実だけが、事実として存在する。「創造者」という言葉を特に使わなくても、これは、創造者と自分との関係を言い表す、本来の宗教性のあり方ではないだろうか？ 何ものか大きな愛をもって、厳しく自分を律する者がいる。それが自分に課せられた責任として現れるのが、「武士道」という倫理ではなかろうか？ 誰が命令するのでもない、自分が自分に命令する。誰に恥ずかしいのでもない、自分が自分に対して恥ずかしい。そういう生き方を、我々は昔からしてきた。

我々はウソをつくことができない。しかしウソしかつけない者たちが存在する。我々は恥を知る者である。しかし恥しか知らない者たちが存在する。そういう者たちが、欧米では、犯罪集団として現実に活動しており、その正体を隠している。しかも、何と我々を支配しようとしている。

問題は、我々の内部に、我々のそれとは全く相容れない者たちの価値観を、こっそり取り入れようとする者たちがいることである。(プーチンは、その同じ懸念を表明している。)

神の真理は繊細である。そして、それに密かに呼応し、道（道徳とは限らない）を開こうとする人たちもまた、繊細な人たちである。これを、粗暴な感覚で押しつぶそうとする者たちがいる。粗い工具を用いて精密機械を修理するようなことが、我々の間では起こっている。これは美しいものの創造の道を、故意に閉ざす者たちである。芸術というものがそ

ここからは育たない。無神論者 (atheist) や無政府主義者とは、歴史的に、文化や芸術の破壊者 (vandalist) という意味だった。彼らは一とき、聖なる科学者として権力者のように扱われたが、それは虚構として鳴りを潜めた。しかし、その残党が猛烈な科学権力者として、現在、威勢を振るっているのは、ご存知の通りである。

司馬遼太郎の小説にもある通り、武士は「私情を断ち、公に生きる」ものである。しかしこれも、型にはまった解釈では、完全に裏切られる場合がある。たとえば、人は無条件に他者のために生きることを教えられても、これを機械的に実行すれば、逆の効果となるときがある。人は激怒し、憎まれ批判されても、責任として、大声を発すべき場合がある。

——以上